

Robert K. Merton 研究

—— アメリカ社会学史の一節 ——

小笠原 真

(奈良教育大学社会学教室)

(平成4年4月20日受理)

I はじめに

本小稿は、現代社会学における代表的理論家の一人として、文字通りアメリカ社会学界はもとより世界の社会学界をもリードしてきた、Robert K. Merton (1910—) を正面から取り上げ、彼が今日までに残してきた数々の研究業績のうち、特に主要なもの若干を選び、それらについて幾分検討することを企図している。

そこで、私はまず Merton の生涯と業績について一瞥を与え、次いで、世界の社会学が刻印してきた足跡に厳しい批判と反省を加える過程で、彼の提唱する「中範囲の理論」(theories of the middle range) を論究し、続いて、Merton 社会学における方法論的特徴としての「機能分析」(functional analysis) について吟味し、さらに続いて、彼が青春の総括として全力投球で書き上げた論文「社会構造とアノミー」(Social Structure and Anomie) について考察を加え、そして最後に、上述の諸テーマについて Merton が論考した所論に含まれる問題点・疑問点を二、三指摘して結びに代えたい。

II Merton の生涯と業績

では、個々の学者の学説を理解する際の常道に従い、Robert K. Merton の生涯と業績を手短に紹介することから始めよう。

まず、Merton の生涯についてみると、彼は1910年7月5日アメリカ合衆国は南フィラデルフィアのスラム街で、東欧系移民第一世代の第二子としてこの世に生を享けた。彼の父はスラブ訛の強い小柄な取り立ててということもない男で、大工と運転手とを交互にやっていた。犯罪や非行といった社会病理現象の温床ともみられるスラム街の汚れた老朽家屋ではあったが、Merton はそれを友情にみちみちた活気があって常に好奇心をそそる住家として記憶している。少年時代の彼は早くより知識に目覚め、既に8歳の頃には公立図書館の常連となり、各種の文学わけでも伝記ものを読みあさった。また12歳の頃より、Merton は隣りに住むセミ・プロの手品師について手品を修業し、元来器用な指先と早口の弁舌とが手使ったちまちそれを習熟し、地域の施設や集会のショーで自ら実演を試みることで日に数ドルを稼ぐようになった。そのままいけば社会学者 Merton は誕生しなかったであろうが、幸か不幸か見事なしかし危険な手品を近所の子供達が真似るので、その親達の苦情が殺到するに及び、彼は手品師を断念することになった。

長じて Merton は、17 歳で奨学金を得てフィラデルフィアのテンブル大学に入り、首席を続けた。大学時代の彼は最初哲学の James H. Dunham (1870—1953) に見込まれたが、二年次に George E. Simpson (1904—) の社会学序説の講義を聴講することによって、社会学への転向をはかり、Dunham を落胆させることになった。Merton はその転向を「Simpson のいったことによるというよりは、人間の行動を道徳的な先入観なしで、客観的に検討出来ることを発見した喜びが大きかったからだ」と回想している。また、彼はその Simpson について「大学の生意気な二年生であった当時の自分を引き受けて、社会関係の体系の作用を研究する知的興奮を理解してくれたことについて感謝したい」とも語っている。なお、フランスの社会学者 Émile Durkheim (1858—1917) の「自殺論——社会学的研究——」(*Le Suicide: étude de sociologie*, 1897) の英訳者である Simpson の研究助手兼話し相手としての Merton が、彼を通して Durkheim への開眼を得たことは想像に難くない。

21 歳でテンブル大学を卒業した Merton は、さらに向学心に燃え、ハーヴァード大学の大学院へと進学し、そこでは名著『社会移動論』(*Social Mobility*, 1927) や大著『社会的・文化的動態論』(*Social and Cultural Dynamics*, 4 Vols., 1937—41) の著者として有名な Pitirim A. Sorokin (1889—1968) に師事した。彼はその師である Sorokin について、「Sorokin の授業から万一はかになかったとしても (勿論ほかにたくさんあったのだが)、ヨーロッパでの諸研究に強く比重のかかった、夥しい文献リストだけは残るね」と友人に語ったり、また、「社会の効果的な研究はアメリカの地域内に限られていると思い込んでいる偏狭な考え方や、社会学の主な題材は離婚や青少年非行のような社会生活の周辺の問題を中心としていると思うスラムに刺激された偏狭な考え方から私を救ってくれた」とも記述している。Merton の大学院時代は丁度 1930 年代であって、アメリカ史上最大の不況期であり思想的激動期でもあったが、同時にこの時期に彼の思想的充電が同期の Kingsley Davis (1908—) や Wilbert E. Moore (1914—) と共にはかれた。なお、Merton の大学院時代の師の一人であり、その後は友人の一人でもあった Talcott Parsons (1902—79) の存在も決して見落としてはならない。何故ならば、Merton 自らが Parsons について次のように語っているからである。すなわち、「教師として早くより分析的理論に対するその熱意を多くの人びとに伝えている。彼の教師としての才幹のほどは、従順な弟子をつくることよりは、むしろ学問的熱意を掻き立てた点に認められる」と。

では、大学院修了後の Merton の教職歴をみると、1939 年チューレン大学助教授となり、1943 年にはコロンビア大学に転じて助教授となり、同大学応用社会調査研究所 (The Bureau of Applied Social Research) の所長 Paul F. Lazarsfeld (1901—76) を助けて、副所長を兼ねた。そこで、彼は Lazarsfeld から社会調査技術を体得した。その後、Merton は同大学院教授として活躍するかたわら、1956 年から 57 年にかけては、アメリカ社会学会の会長の地位にもついた。彼はドイツの社会学者 Georg Simmel (1858—1918) 同様講義の名人であり、ノートなしの自在の講義がそのまま論文になるような見事な論理構成と適切なデータで学生を魅了した。したがって、Merton の門下生に優秀な人材が多数集まってきたことは想像に難しくなく、事実 Lewis A. Coser (1913—) をはじめとして、Peter M. Blau (1918—), Philip Selznick (1919—), Alwin W. Gouldner (1920—), Seymour M. Lipset (1922—) 等はすべてそうである。だが、その彼も 1979 年には名誉教授となり、現在に至っている。

さて、Merton の研究業績へと眼を転ずると、彼の 28 歳の時にハーヴァード大学に提出した

学位請求論文であり、同時に広く世にも問われた著書『十七世紀イギリスの科学・技術および社会』(*Science, Technology and Society in Seventeenth-Century England*, 1938) をまず挙げねばならない。彼はそのなかで、ピューリタンの宗教的エートスと十七世紀イギリスにおける実験を基礎とした自然科学の営みとの間には、適合関係、親和関係があることを指摘し、ピューリタンの宗教的エートスが王立協会 (Royal Society) を中心とした科学の制度化に貢献したことを強調している。

だが、Merton をして世界的に著名ならしめた主著は、なんとといっても 1949 年に公刊された論文集『社会理論と社会構造』(*Social Theory and Social Structure*) であり、その増補改訂版は 1957 年に世に問われている。今その改訂版によって内容をここで簡単にみてみると、第 I 部「社会学理論」(*Sociological Theory*) は第 1 章から第 3 章までをもって構成され、気 II 部「社会的文化的構造の諸研究」(*Studies in Social and Cultural Structure*) は第 4 章より第 11 章までがあてられ、第 III 部「知識社会学とマス・コミュニケーション」(*The Sociology of Knowledge and Mass Communications*) は第 12 章より第 14 章までであり、そして第 IV 部「科学の社会学における諸研究」(*Studies in the Sociology of Science*) は第 15 章より第 19 章までである。このように Merton の研究は極めて多方面にわたっているが、私は以下の各節では、彼のシンボル・マークのような「中範囲の理論」をはじめとして、Merton 社会学における方法論の特徴としての「機能分析」、そして、彼が青春の総括として全力投球で書き上げた論文「社会構造とアノミー」に限って幾分考察してみたい。

そのほか Merton には、『巨人の肩の上に』(*On the Shoulders of Giants*, 1967)、『科学の社会学——理論的および経験的諸研究——』(*The Sociology of Science: Theoretical and Empirical Investigation*, 1973、この著は厳密には第三者の Norman W. Stover (1930 —) の編集および「序論」をそえたものではあるが)、そして、『社会調査と開業的職業』(*Social Research and the Practicing Profession*, 1982) などの単者もある。また、彼の共著となると、Marjorie Fiske や Alberta Curtis との『大衆説得』(*Mass Persuasion*, 1946) や、Marjorie Fiske や Patricia L. Kendall との『焦点面接法』(*The Focussed Interview*, 1956) などを挙げることが出来る。さらに、Merton の編著となると、Lazarsfeld との『社会調査における連続性』(*Continuities in Social Research*, 1950) や、Robert A. Nisbet (1913 —) との『今日の社会問題』(*Contemporary Social Problems*, 1961) などがある。

なお、ここで一言付言すれば、Merton に捧げられた記念論文集として、彼の弟子 Coser が編集した『社会構造の観念』(*The Idea of Social Structure*, 1975) のあることも見逃してはならない⁽¹⁾。

Ⅲ Merton の社会学理論——特に「中範囲の理論」を中心に——

Robert K. Merton の主著『社会理論と社会構造』の序文の冒頭に述べられている言葉はこうである。「その創立者のことを忘れかねている科学はもう駄目である。その目標において志が遠大であり、その取扱いにおいて平凡なのは、まだ初期の段階にある科学の特徴である」。これはロンドン大学の数学教授であり、後年ハーヴァード大学の哲学教授でもあった Alfred N. Whitehead (1861 — 1947) の『思想の組織』(*The Organization of Thought*, 1917) からの引用文である⁽²⁾。では、なぜこのような抜粋を彼はその主著の劈頭に掲げたのであろうか。それは

いうまでもなくこの節での中心テーマである Merton のシンボル・マークたる「中範囲の理論」(theories of the middle range), すなわち、結論部分を取捨して言えば、調査研究を通じて豊富になっていく小作業仮説と、多くの経験的現実のうちに認められる事象の斉一性命題あるいは巨大な概念図式との中間にあって、この両方を架橋しながら双方の機能を独自に活性化させていくような社会学の特殊理論、をより適切に導びかんがためである。

さて、Merton は壮大を誇る理論体系と特殊な個別問題に関する経験的調査の橋渡しとして、いわゆる「中範囲の理論」の提唱を行なうのであるが、いかにしてそれが可能となるかについての建設的な提案としては、わずかに『社会理論と社会構造』の叙述中、「序論」(Introduction)の箇所と社会学理論と経験的調査の相互関係を述べた二章——つまり、第2章「社会学理論の経験的調査に対する意義」(The Bearing of Sociological Theory on Empirical Research)と第3章「経験的調査の社会学理論に対する意義」(The Bearing of Empirical Research on Sociological Theory)——において、ややまとまった形で述べているに過ぎない。

そこで、Merton は第2章「社会学理論の経験的調査に対する意義」および第3章「経験的調査の社会学理論に対する意義」において、まず、「最近の社会学理論の歴史は、対照的な二つの主張の交替という形でほぼこれを書くことが出来る。一方には、何よりも一般化を求め、社会学的法則の樹立に達する途を出来るだけ速かに発見しようとする社会学者がいる。……他方の極には、自ら試みる調査の意味合いをあまり厳密に追及しないで、自分らの報告する事実はこちらだ、と自信満々の度胸のよい連中がいる」⁽³⁾と述べ、また、前者のグループを特徴付けるモットーとして、「われわれのいうことが事実かどうかはわからないが、しかし少なくともそれは重要な意義をもっている」点を挙げ、後者のグループのそれとして、「事実はしかじかかくかくであって、それは論証出来るが、その意義を指摘することは出来ない」ことを指摘している⁽⁴⁾。そして、彼は両立場のいずれをも退けなければならないとして、「現世の諸事実で汚されていない純粹理念の天上界に超然としている社会理論家のステレオタイプは、質問表と鉛筆を両手に持ってばらばらの無意味な統計を熱心に追い掛けている調査家のステレオタイプと同じように、急速に時代遅れとなりつつある。というのは、最近数十年来社会学を構築するにあたって、理論家と経験主義的調査家とは協働することを学んだからである。のみならず、協働しているうちに両者は互いに語りあうことを学んだ。時によるとこれは社会学者が自分自身に語り掛けることを学んだという意味に過ぎない。けだし、最近同一人で理論と調査の両方を手掛ける人が増えてきたからである。専門化と統合とは相携えて発達してきた。以上の事柄は、理論と経験的調査とが交流しなければならないことを悟らせたのみならず、また両者が現に交流するという結果をもたらしたのである」⁽⁵⁾と強調している。

しかも、現実の諸事実で汚されていない純粹理念の天上界に超然としている社会理論家の一人に、私が既に他の論文で明らかにしたように、C. Wright Mills (1916—62) のようにあからさまではないにしても⁽⁶⁾、アメリカの理論社会学者 Talcott Parsons を含めていることは、Merton 自身の書いた他の論文「役割セット——社会学理論の諸問題——」(The Role-Set: Problems in Sociological Theory)における次のような主張が暗に示唆している。すなわち、「今日公平にみて、Parsons の仕事は一つの包括的な社会学理論を展開しようとする重要な努力を代表していると思う。その狙いは、実質的な解決を提供することにあるのではなくて、むしろ社会体系の基本的変数を述べるにある。……いろいろな経験的研究に理論的ガイダンスを与えるという功績はある。ただそれがあまりに急速に推敲されるので、そこに表現されたアイデアを経

験的にテストしようとして企てられた系統的研究の速度を、はるかに追い抜いてしまう実際上の難点がある」⁽⁷⁾ と。

だが、ここでは最近の社会学理論という表現がみられるものの、むしろ Auguste Comte (1798—1857) や Herbert Spencer (1820—1903)、Leonard T. Hobhouse (1864—1929) や Gustav Ratzenhofer (1842—1904) などの名前を挙げて、その思弁的性格を云々した人びとをストレートに指していると考えてよい⁽⁸⁾。しかも、これらの人びとの致命的欠陥としてもう一つ累積に欠けていた点がある。それ故、累積的な伝統というものはまだ少ないので、社会学界の巨人の肩はその上にわれわれが乗って立つほどに強固な基盤をなしてはいない。この序論の冒頭に掲げた「その創立者のことを忘れかねている科学はもう駄目である」という Whitehead の警句については、したがって、選択的累積的に著しい進歩を示している物理的諸科学よりも、社会学のような科学こそ反省しなければならないとは、まさに Merton の主張である⁽⁹⁾。

次いで、Merton は従来漠然と社会学理論という名前で呼ばれてきたもののなかから、本来の意味での社会学理論、別言すれば厳密な意味での狭義の社会学理論とみなすことの出来ないものを篩い落としている。それらは(1)方法論 (methodology)、(2)一般的な社会学的方針 (general sociological orientation)、(3)社会学的概念の分析 (analysis of sociological concepts)、(4)社会学上の事後解釈 (post factum sociological interpretation)、(5)社会学における経験的一般化 (empirical interpretation in sociology) である⁽¹⁰⁾。なかでも、(4)の社会学上の事後解釈と(5)の社会学における経験的一般化は、多くの社会学者によって本来の意味での社会学理論と混同されているので、ここでその非科学性を明らかにする必要がある。

そこで、(4)の社会学上の事後解釈とは、予め仮説をつくりそれを新たに観察資料を集めて経験的に検討するという行き方でなく、また等しく既に行なわれた観察の資料を扱うにしても、それから仮説を導き出すのではなく、それを説明し解釈するという行き方である。説明は既に十分に確認済の理論に基づいている場合もあるが、多くはまだ十分確認されていない仮説または既成の仮説によって行なわれる。だが、前者の場合説明そのものはむしろ正しいが古い理論の例証たるにとどまり、新しい理論を提出するものではないし、後者の場合にも当面の資料に調和する仮説が選ばれ、また構築されるのであるからして、その資料に関する限り説明は破綻をみせない。しかし、それは見せ掛けの説明あるいはもっともらしさの次元にとどまる説明である。当面の資料群と調和する仮説、解釈は一つにとどまらないのに、それらを系統的に探究すること、それらの解釈から引き出される推論を新しい観察によって検証することが行なわれないからである⁽¹¹⁾。

また、(5)の社会学における経験的一般化とは、二つあるいはそれ以上の変数間の関係の観察された斉一性を要約する孤立した命題である。例えば、ドイツの統計学者 Ernst Emgel (1821—96) の消費に関する法則がその一例である。つまり、この種の命題はそれが正確なものである場合においても、それ自体社会学理論をなすものではなく、社会学に材料を提供するにとどまる。理論作業、経験的調査研究の理論への方向付けは、一組の相互に関係付けられた命題に対するこの種の斉一性の関係が試案的に設定された時にはじめて開始されるのである⁽¹²⁾。

では、Merton 自身が観念する厳密な意味での狭義の「社会学理論」(sociological theory)とは、いかなる意味内容のものであろうか。彼は「理論に対する経験的一般化の関係を示し、理論の機能を明らかにするには、この種の一般化が一群の実質的理論のなかに編み込まれ」⁽¹³⁾ ることによって、一つの普遍的な科学的法則を獲得することが出来ると考える。社会学理論の仕事は正しくはこれでなければならない。例えば、統計的にみてカトリック教徒はプロテスタントより

自殺率が低いという経験的原則がある。これが社会学的に一般化され、一つの法則にまで高められるには、他の諸命題のセットのなかに組み入れられることが必要である。その諸命題とは次の四種である。つまり、(1) 社会的凝集は強い緊張や不安に晒されている集団成員に心理的支えを与える。(2) 自殺率は人びとの除去されない不安や緊張の函数である。(3) カトリック教徒はプロテスタントよりも社会的凝集が強い。(4) したがって、プロテスタントよりもカトリック教徒の方が自殺率の低いことが予測される⁽¹⁴⁾。そして、以上の事例は理論との関係における経験的一般化の占める位置を明らかにし、また、理論のいくつかの機能を例示するのに役立つとして、Merton は以下の五点を指摘している。(1) この事例が示すように、元来経験的一般化それ自体に理論的適切さがあるとかないとかいうのでなく、この一般化がより高次の抽象（カトリック—社会的凝集—不安の除去—自殺率）のなかで概念化され、しかもそれらの抽象が変数間の結び付きに関するもっと一般的な立言となって現われる時に、理論的適切さが出てくる。(2) 互いに関連した一組の命題から一つの斉一性を引き出すことによって、その理論的適切さが一度確立されると、理論と調査知見の両者の累積がうまく計られることになる。自殺率の差という斉一性はそれが引き出されるものになった一組の命題を一層確証する。これが体系的理論の重要な機能である。(3) 経験的斉一性はただそれだけではさまざまな帰結を引き出すわけにはいかないが、それを改めて方式化し直すことによって、自殺などとはおよそ縁遠い行動領域で種々の帰結——一例を挙げれば、強迫観念に憑かれた行動が集団凝集の不足とも結び付く——を引き出せるものになる。このように経験的斉一性が理論的立言に改められると、含まれている意味を次々と探求することによって、調査の実りが増すことになる。(4) 理論は理由を提示することによって予測のための根拠を導入するが、この根拠は以前に観察された趨勢をただ経験的に補足したものよりもっと確実である。だから、もしもカトリック教徒の間に社会的凝集の減退していることが別の測定で指摘されれば、理論家はこのグループの自殺率増加の傾向を予測するであろう。ところが経験一点張りで理論のない人は、補足に基づいて予測する以外に方法がないであろう。(5) 理論の諸機能についてこれまで掲げたリストは、さらに理論のもう一つの属性を前提とする。そして、この属性は少なくとも今日に至るまで、特に社会学理論の悩みであったある一般の問題を引き起こした。すなわち、もし理論が生産的であろうとすれば十分正確で確定的でなければならない。正確ということはテストが可能かどうかという規準の不可欠な要素の一つである。一つの理論から引き出せる推理（予測）が正確であればあるほど、この予測に相応しい別の仮説を立てる必要は少なくなる。別言すれば、正確な予測とデータは結論肯定の論理的誤謬が調査に及ぼす経験的影響を減殺することになる⁽¹⁵⁾。

ところで、Merton によれば、以上の所論は限られたものではあったが、少なくとも理論と経験的調査の間にもっと緊密な繋がりが必要だということだけは指摘した積りであるといわれる。一方ではまったく非連続的な経験的調和となって現われ、また他方では経験的テストに裏付けられていない体系的理論化となって現われている。だが、これは自明の理であるが、分散でなく連続性を勝ちとるためには、経験的研究は理論的指向をもち、また理論は経験的に確証出来なければならない。しかし、この事実を単に事実として認めておくだけでなく、さらに一歩進めて、両者の結合をたやすくするようなある種の取り決めを、社会学理論のために示唆しておくことも出来るはずである。この取り決めを「形式的導出」(formalized derivation) と「系統的整理」(codification) と呼ぶことにしたい、と彼は考える。そして、「形式的導出」の方は一つの理論にどんな意味が含まれているかということに、われわれの注意を集中させるが、これに対して

「系統的整理」の方は一見異なった行動領域における利用可能な経験的一般化を体系化しようとするものである。「系統的整理」はテストされるべき仮説の「形式的導入」を補う一つの手続きであるが、それは妥当な社会学理論と適切な経験的調査の相互発展を助けるであろう⁽⁸⁾。

さて、Merton がこのような主張をした背景には、いうまでもなく彼のシンボル・マークたるオリジナルな「中範囲の理論」を導出することがある。そこで、彼の「中範囲の理論」について考察を加えることにしよう。

Merton の観念するところ、「中範囲の理論とは、日々繰り返される調査などで豊富に展開されている小さな作業仮説と、経験的に観察される社会的行動の非常に多くの劃一性を出来れば導き出しようとするような主要な概念的図式を内容とする包括的思弁とを媒介する理論である」⁽⁹⁾。けれども、彼は他の箇所では「中範囲の理論のもつテストしようという性質だけがこの理論の唯一の、そして主たる属性でないことに注意を払わねばならない。むしろ疑いのない事実はこの理論の諸概念が中位の一般性を有するということである。すなわち、これらの概念が一定の範囲の社会現象に関する証拠を系統付けるにあたって効果的に利用しうるほどに特殊であって、しかもますます広範囲の一連の一般的結論のうちに統合しうるほどに一般的である、ということである」⁽¹⁰⁾と述べ、またやや長文ではあるけれども、「われわれの主要な任務は、むしろ今日一定の限られた範囲のデータに適用出来る特殊な理論——例えば、階級動態、相葛藤する集团的圧力、権力の発現、人間相互間の影響の作用などに関する理論——の展開にあるのであって、一挙にしてあれやこれやの理論を導出することの出来る『統合された』概念的体系を求めてはならない、と私は信ずる。もっぱら高度の抽象的理論の探究に浮き身をやつしている社会学の理論家は、外見だけは近代的になっても、彼の精神の道具立ては乏しくガランとしていて味気のないものになる恐れがある。一般理論も特殊理論も共に必要であるというのはいかにももっともで不思議はないが、問題はわれわれの貧弱な資源をどう割り当てるかということである。私はここで、社会学の効果的な概念図式を確立する道は、特殊理論をつくりあげることによっていっそう効果的に開拓されるということをも、また現在直接に一般理論の樹立を求めても、それは計画倒れに終るということを示唆している」⁽¹¹⁾とも主張している。

このようにみえてくると、要するに Merton の考えるところ、一方で網羅的全体理論たる一般理論の定立は社会学においては時期尚早だといわざるをえないし、他方、単なる経験的記述や単なる作業仮説は、その科学としての成立可能性に疑問がある。したがって、こうした両極の中間に位置し、それらを媒介しうる理論としていわゆる「中範囲の理論」を設定しなければならない。だから、「中範囲の理論」は経験的方法に立脚し、いずれ発展すべき全体理論＝一般理論への橋渡しをするものである。だがここしばらく、社会学においてそうした意味における一般理論の構築が可能であると考えべきではない。このことは別言すれば彼の場合決して「中範囲の理論」に安住するものではないことを示唆している。それ故、当面の社会学者の課題と考えられる「中範囲の理論」の現実的任務は、一定の限られた範囲の社会学的問題に適用出来る特殊理論——例えば、社会的移動、逸脱行動、コミュニケーション、役割葛藤、社会規範の形成、对人的影響、準拠集団の理論など——を展開することであろう⁽¹²⁾。

IV Merton の社会学方法論——特に「機能分析」を中心に——

さて、Robert K. Merton の社会学理論わけでも「中範囲の理論」にひとまず別れを告げ、次

に、Merton 社会学の方法論的特徴たる「機能分析」(functional analysis)へと眼を転ずることしよう。

まず、彼の「機能分析」を検討するにあたって最も重視しなければならない論文は、主著『社会理論と社会構造』の第1章に収められている「顕在的機能と潜在的機能——社会学における機能分析の系統的整理のために——」(Manifest and Latent Functions: Toward the Codification of Functional Analysis in Sociology)である。次いで、この論文の冒頭で、Merton は「機能分析は社会的解釈の諸問題を取り扱う現代の研究方針のなかで最も有望である反面、恐らく最も系統立って整理されていない。……あらゆる解釈図式と同様に、機能分析は理論と方法とデータとの三者の結び付き如何にかかっている。この三つの結び付きのなかで方法が最も弱い」⁽²⁾と述べ、その機能分析にかける彼の意気込みを示している。

そこで、Merton は概念の混乱と諸仮説がもつ誤謬とのために、統一らしい統一を有しない雑然たる状況を呈している機能的アプローチの現状を認めた上で、このような状態を整理してこれに一つの統一ある形を与えんとし、いわゆる「社会学における機能分析の一範例」(a paradigm for functional analysis in sociology)を提示している。その中身は11項目よりなっており、それらは以下のようなものである。(1)分析対象となる項目——例えば、社会的役割、文化型式、社会規範、社会構造など——を決定する。(2)機能分析は社会体系のなかに含まれる諸個人の動機付けの概念をたえず仮定し、明示的にそれを用いる。それ故、かかる主観的動機や目的の概念を必要とする。(3)客観的結果つまり「機能」(functions)と「逆機能」(dysfunctions)の概念を用いる。だが、この点については極めて重要であるので後ほど詳述する。(4)機能または逆機能によって助長もしくは阻害される「単位」(unit)が何であるかを明らかにする。(5)あらゆる機能分析の根底には暗黙であれ明示的であれ、特定の体系の「機能的要件」(functional requirements)の概念を用いる。(6)社会学における機能分析には、生理学や心理学の如き他の諸学科のそれと同様に、特定の機能を営む働きをする「機構」(mechanisms)の具体的かつ詳細な説明を必要とする。(7)特定の社会構造が機能的に不可欠であるという根拠のない仮定をひとたび放棄すると、「機能的選択項」(functional alternatives)とか「等価項目」(equivalents)とか「代用項目」(substitutes)という概念がただちに必要となる。(8)特定の機能を果たしうる諸項目の変異する範囲は無制限ではないこと、別言すれば、構造的脈絡または構造的拘束が存在することを常に念頭におく必要がある。(9)機能分析者は社会構造の静態に焦点をおき、構造的変動の研究を無視するという傾向がある。しかるに、逆機能の概念は構造的平面における歪み、圧迫、緊張の概念を含むが、それは「動態」(dynamics)と「変動」(change)の研究に対する分析的アプローチを与えるものである。それ故、「動態」と「変動」の概念を用意する。(10)機能分析の検証に関する諸問題として、文化や集団を横断する「比較分析」(comparative analysis)を通じて確認を行なう。(11)機能分析自体はイデオロギー的立場に拘束されないことを認識する⁽³⁾。

ところで、このような機能分析の範例を設定するに際して、Merton はアメリカの生理学者 Walter B. Cannon (1871—1945)の採用した分析的方法の論理構造のなかにそのモデルを求めた。勿論、社会学における機能分析が生理学や生物学のそれとの単なるアナロジーやホモロジーに陥ってはならないことは、彼自身も認めるところである。それというのも、それは再び社会有機体説と同じ轍を踏むことになるからである⁽⁴⁾。そして、このような Merton の掲げた「社会学における機能分析の一範例」は、あくまでも「暫定的」なものであり、いわば試験的意味での出

発点でこそあれ、決して変更すべきでない到達点ではない。それは社会学における機能分析の「双眼鏡」(field-glass)であって、「塵除け眼鏡」(blinker)に用いられてはならないことを彼自身も警告している⁽²⁴⁾。

さて、Merton が機能分析の有効性を主張する際大きな支柱となっているものに、さきにも指摘しておいたように、「機能」と「逆機能」の両概念の導入とその両概念の区別とがある。すなわち、彼は「機能」および「逆機能」の概念を次のように定義している。「機能とは一定の体系の適応ないし調整を促す観察結果であり、逆機能とはこの体系の適応ないし調整を減ずる観察結果である」⁽²⁵⁾。しかも、ここに導き出された「逆機能」の概念は、構造的平面における歪み、圧迫、緊張の概念を含むが、それは動態や変動に対する分析的アプローチを与えるものと、Merton にあっては考えられていることはさきにも記述した通りである⁽²⁶⁾。そして、社会構造における文化的目標と制度的手段との強調度のアンバランスから生じる「逸脱行動」(deviant behavior) に関する Merton の分析は、かかる基礎的変動の過程に科学的メスを入れたものとして注目されるので、この点については私は次節で詳述してみたい。だが、この「機能」と「逆機能」の区別以上に彼が重視するものに、「顕在的機能」(manifest functions) と「潜在的機能」(latent functions) の区別がある。そこで、以下この両概念の意味内容を詳述しなければならない。

Merton は一方では「機能の概念は観察者の見地を含み、必ずしも当事者の見地を含まない。社会的機能とは観察しうる客観的諸結果を指すのであって、主観的意向(狙い・動機・目的)を指すものではない。そして、客観的な社会学的結果と主観的意向とを区別しなければ、不可避免的に機能分析は混乱に陥る」⁽²⁷⁾と述べると共に、他方では、その混乱を避けるためにも、「主観的目論見と客観的結果との一致する場合並びに両者の食い違う場合の概念的区別を導入する必要がある。顕在的機能とは一定の体系の調整ないし適応に貢献する客観的結果であって、しかもこの体系の参与者によって意図され認知されたものである。これと相関連して、潜在的機能とは意図されず認知されないものである」⁽²⁸⁾と主張している。したがって、顕在的機能と潜在的機能との区別は、社会学の文献にしばしばみられる混同、すなわち社会行動の意識的動機付けとその客観的結果との誤った混同を防ぐために考え出されたものである⁽²⁹⁾。

否、そればかりか、顕在的機能と潜在的機能の両概念の区別がもつ素出的 (heuristic) な目的として、Merton が具体例を挙げつつ次の四点を指摘している。

(1) 一見非合理的に思われる社会的文化的型式の分析に役立つ。従来集団行動がその額面通りの目的を達成しない場合には、迷信とか非合理性とか単なる伝統の慣性などと簡単に説明されてきた。例えばホピ族の雨乞いの儀礼は未開民族の迷信的な慣行として片付けられ、それだけで問題が解決されたと思われてきた。だが、Merton の観念する潜在的機能の概念を用いて研究を進めると、この儀式が雨神とか気象上の現象に及ぼす結果ではなくて、この儀式を営む集団に対して与える結果を検討することになる。つまり、儀式に際して各地に散在する集団の成員が集合して共同活動に参加する定期的な機会をもつので、儀式は集団的統一性を強化する潜在的機能を果たしているといえる。このように、社会学的分析として大切なことは、かかる行動様式が動機付けられざる客観的結果として特定集団に対してもつ潜在的機能を把握することである⁽³⁰⁾。

(2) 両観念の区別は、社会学者が極めて多産的にその特殊な技術を発揮しうる行動や態度や信念の領域に注意を向けるのに役立つ。Merton はこの点を説明すべく「ホーソーン実験」(Hawthorne experiment) ——周知のように、アメリカのウェスタン・エレクトリック会社の

ホーソン工場で1924年から32年にかけて行なわれた一連の研究をいう——を採用し、以下のように主張している。すなわち、この研究の初期の段階では、工場労働者の「能率対照明」の問題が取り上げられたが、約二年半にわたる研究結果は両者の間に殆ど画一的な関係のないことが判明した。つまり、研究者達は潜在的機能の概念を欠き、まったく顕在的機能の探究だけに問題を限っていたのである。そのために、彼らは実験集団のメンバーと対照集団のそれとの関係とか、労働者と研究者との関係に及ぼす実験の社会的結果には全然注意を払わなかった。ところが、その後も研究を重ねていくうちに、この実験に参加する労働者の自我像や自己概念とか、集団成員間の対人的関係とか、集団の結合と統一に対してこの「新しい実験的状況」が及ぼした結果を調査グループが究明しようとするようになった。つまり、社会学的枠組が導入されたのだ。その結果はこの研究の性格を一変させた。最早研究者たちは単一な変数の結果だけをテストすることを止め、統制の実験の代りに相互依存的な諸要素の体系として記述され理解されるべき社会状況の概念を用いることになった。それ以降は、今日周知のように、労働者の標準的慣行とか、労働者の間に出来たインフォーマルな組織とか、「賢明な管理者」の制定した労働者の競技とか、労働者相手のカウンセリングや面接調査の大規模な計画などの潜在的機能を探し出そうとする研究を大いに推進することになった。そのなかでも、Willam I. Thomas (1863—1947) と Florian W. Znaniecki (1882—1958) によってつとに強調され、近くはEdward A. Shils (1911—) によって指摘されるところの、産業組織に現われた第一次集団の潜在的機能に注意を向けるに至ったことは広く知られるところである⁸¹⁾。

(3) 潜在的機能の発見は社会学的知識を大いに増進させている。この点を説明すべく、Merton は潜在的機能の概念を暗黙のうちに用いた研究事例として、Thorstein B. Veblen (1857—1929) の有名な「誇示的消費」(conspicuous consumption) の分析を挙げている。すなわち、消費材の購入する顕在的目的は、例えば自動車はある種の輸送に供するように、消費財の明示的な狙いとしている欲求の充足である。ところが、Veblen が強調するように社会学者もまた獲得や蓄積や消費の潜在的機能を考察すべきであって、これらの潜在的機能は顕在的機能とはまったく掛け離れたものである。つまり、これらの潜在的機能のうち、特に誇示的消費の型式の存続と社会的分布を説明する助けとなるものに、それが単に欲求充足のみならず、「金銭的力と名声の獲得と保持」の象徴と化している点がある。Veblen の逆説は人びとが高価な財を購入するのは、それが優良だからというよりもむしろ高価だからであるということである。というのは、彼(Veblen)が機能分析において引き出しているのは、顕在的方程式(「高価=財の優良」)よりもむしろ潜在的方程式(「高価=より高い社会的地位の目印」)だからである。とはいえ、Veblen は顕在的機能の効果を何等否定するものではなく、これらの直接的な機能が一般に行なわれている消費型式を十分に説明するものではないということとどまる。だが、Merton にとっては、補助的ないし随伴的な潜在的機能を指摘することの方が、顕在的機能の観点から引き出される日常的な通俗的先入観よりも、はるかに重要であると認識されている⁸²⁾。

(4) 潜在的機能の概念を採用することは、素朴な道徳的判断をもって社会学的分析に置き換えることを防止する。今その点を具体的に記述してみると、顕在的機能に基づく道徳的評価は黒か白かをはっきりさせる傾向がある。だが、潜在的機能に気付くと事態はもっと複雑になることが多い。というのは、潜在的機能は通常道徳的判断の基礎となっている顕在的結果と同一の仕方で作用することにはならないからである。例えば、アメリカ人の大部分は政治的ボス組織や政治的駆け引きが明らかに「悪」で「望ましくない」ものと判断している。それにも拘らず、政治的ボ

ス組織は灰のなかから逞しく立ち上る不死鳥のような性質をもっている。このことから、持続的な社会型式や社会構造が一定の時期には他の既存の型式や構造では、十分に果たせない積極的機能を通常（いつも決ってというわけではないが）営むものだという機能的見地から出発すると、恐らくこの公的には非難されるべき組織つまり政治的ボス組織が、現在の諸条件の下では基本的な潜在的機能を充足しているという考えに立ち至る。しからば、この型式や構造の存続する根拠はどこにあるか。ボス政治やボス組織の役割を理解するには、次の二種類の社会学の変数に注目しなければならない。すなわち、(イ) 道徳的に是認された構造では、重要な社会的機能を果たすことが不可能でないまでも困難であるために、政治的ボス組織がいつでもこうした機能を果たせるようになっている「構造的脈絡」(structural context) と、(ロ) ボス組織が事実果たしている潜在的機能がなければ、充足することの出来ないそれぞれの欲求をもっている「下位集団」(subgroups) とである⁽³³⁾。

そこで、第一の「構造的脈絡」よりみていくと、アメリカの政治組織の立憲的仕組は高度の中央集権の合法的可能性を明確に防止しており、その結果効果的責任ある指導力の発達を阻害している。自由に対する危険物として不信の目を向けられた権力については、それ故に集中化よりも分散が企図され、いわゆる「抑制と均衡」の体制が国家や地方に等しく確立される。憲法上における権力の分散は事実上の決定や活動を困難にするだけでなく、実際に活動が行なわれても、その活動は遵法主義的な配慮によって規定され枠を与えられる。その結果、もっと人間味の豊かな仕組みをもつ政治的別働隊つまりボス組織が現われて、法律の網を潜ることをその主な目的とするようになる。このことは別言すれば、非公認のデモクラシーの法律無視が公認のデモクラシーの遵法主義を是正する対抗策に過ぎないことを意味する。要するにもっと一般的な言葉でいえば、公的な社会構造のもつ機能的欠陥は、当面の必要を多少ともより有効に果たすために、それに代るべき非公式の選択的構造を生み出すのである。まさに政治的ボス組織がそれである⁽³⁴⁾。

では、第二のさまざまな「下位集団」に対する政治的ボス組織の機能についての考察へと進めることにしよう。周知のように、政治的ボス組織の力の一つの源泉は地方共同体や近隣集団に基盤をもつところに由来する。政治的ボス組織は選挙民を無定形の無差別な多数の投票者とはみていない。つまり、ボス組織は鋭い社会学的直観をもって、投票者が特殊な近隣社会に住み、特別な個人的問題と個人的欲望をもつ人間であることを理解している。今日の一般に非人間的な社会では、ボス組織はその地方機関を利用して困っている人びとに、あらゆる援助の手を人情深く個人的に差し延べてやるという重要な社会的機能を果たしている。この機能を適切に評価するためには、援助が与えられる事実だけでなく、援助の方法にも注意することが大切である。つまり、公的機関の福祉事業家の職業的なやり方は、依頼人の法定の援助要求を詳しく取り調べた揚句、冷たい官僚的な僅かばかりの援助供与を相手の心に印象付けるのが通例である。これに反して、地域に密着した政治的ボスのやり方は、一向に相手を問い詰めることもなく、法定上の資格規則に従うことを強要せず、個人的な事情に立ち入って詮索もしない。多くの人びとわけても「特権を奪われた階級」(deprived classes) の人びとにとって、「自尊心」の喪失は法定の援助を受けるにはあまりに高価な犠牲である。それ故、「特権を奪われた階級」は合法的な社会構造のもとでは十分に満足されない欲望をもつ一つの下位集団であって、政治的ボス組織がこの欲望を満足させているのである⁽³⁵⁾。

第二の下位集団たる企業集団（元来は大企業だが小企業も含めて）に対して、政治的ボスは直接の経済的利得を伴う政治的特権を与えるという機能を果たしている。すなわち、企業団体わけ

でも鉄道会社、地方運輸会社、電灯会社、報道通信機関などの公益事業を営む企業団体は、現代の状態を安定化し最大の利潤獲得の目的に近づきうるような特別の政治的供与を求める。面白いことに、企業団体は混沌とした無統制な競争を避けたがることがしばしばある。それは競争を統制し規整し組織化する経済的独裁者のより大きな保障を欲する。ただし、この独裁者が公的監査や公的統制を受けて決定を下す公的官僚でないことを条件とする。何故ならば、公的統制は政府統制であり、したがってそれはタブーであるから。かくして、政治的ボスはこれらの要件を立派に果たすのである⁶⁶⁾。

第三の下位集団たるある種の人種集団やスラム生活者たちに対して、政治的ボス組織は独自の機能を果たす。つまり、アメリカ文化は社会の全成員に対して合法的な「成功」目標として金銭や権力を極端に強調する。だが、彼らは金銭や権力の成功を成し遂げる機会が極めて少ない。そこで、政治的ボス組織はこうした個人的出世街道から締め出された人びとに対して、これに代るべき社会的移動の通路を与える。すなわち、政治的ボス組織は「合法的な」事業にサービスをするとまったく同様に、「非合法的な」事業つまり悪徳行為、犯罪、強請にもこれに劣らぬサービスを提供する。かくして、職業的犯罪者、テキヤ、賭博者の如き下位集団も産業家、事業家、投機家のような下位集団と基本的には類似の組織や要求や動きをもつのである⁶⁷⁾。

最後に、最も重要なことは「合法的」事業と「非合法的」事業との経済的役割がたとえ同一ではないまでも次のような基本的な類似性をもつ点である。すなわち、(i) 財やサービスに対する市場の需要（例えば、1950年の時点でのアメリカの約50万と見積もられる職業的売春婦と20万の医者および35万の看護婦とを比較してみよ。）(ii) 企業利得を最大ならしめようとする経営者の関心、(iii) これらの企業家活動を妨げる恐れのある政府を部分的に抑制する必要、(iv) 企業と政府との有効な連繋をはかる能率的で有力な中央集権的機関の必要がこれである。ところで、このようにみてくると、悪徳行為や犯罪や強情はまさに「大企業」なのだ。かくして、政治的ボス組織は「合法的な大企業」にもまして「非合法的な大企業」にもある種の機能を果たすことが予想される。つまり、政治的ボス組織が犯罪や悪徳行為や強請をする人びとに対して果たす機能は、政治的ボス組織を動かして当然受けるべき政府の干渉を受けずに、大市場の経済的需要を充たすという点にある⁶⁸⁾。

このようにみてくると、Mertonのいう「構造的脈絡」は政治的ボス組織を存続せしめる「全機構的な体制」の骨組を示し、また、特権を奪われた階級、企業団体、人種集団、非合法的事業などといった「下位集団」は、政治的ボス組織の活動によって直接受益する具体的な対象をなしていることが判明しよう。

以上長々と考察してきた四点は、Mertonが顕在的機能と潜在的機能の両概念の区別がもつ索出的な目的として挙げたものである。それ故、顕在的機能と潜在的機能の区別と後者（潜在的機能）の摘出は、彼の機能分析の有効性を主張する際の最も重要な支柱となっており、社会学における機能分析の系統的整理にあたって、Mertonがあえて「顕在的機能と潜在的機能」のタイトルを付けた意味も理解出来よう。

V Mertonの「社会構造とアノミー」論

知られるように、社会学の分野で「アノミー」(anomie)の概念化はÉmile Durkheimによって最初に試みられ、本稿で取り上げているRobert K. Mertonによってより体系的に整序さ

れ展開されてきた。

そこで、Durkheim は十九世紀思想のなかに根強く存在していた人間行為についての功利主義的説明や生物学的解釈を退け、社会生活の所産としての法、道徳、宗教が人間行為にどのような規制力を及ぼしているかを体系的に考察した。例えば、『自殺論——社会学的研究——』では、未開社会における集合体中心的な規範が義務としての自殺（愛他的自殺）を発生させていることや、近代社会では個人主義的価値が極端に強まり、反面集団規範の規制力が弱まることによって個人の孤立による自殺（利己的自殺）への傾向が高まることを指摘する。そして、彼は社会規範の正常な作用が社会成員の連帯を保証するという見方に立って、規範の弛緩や欠如によって生ずる結果（アノミー的自殺）に注目し、連帯の崩壊や行為の無規制を意味するアノミーの概念を提起した⁽³⁹⁾。

そこで、Merton は Durkheim のこのアノミー概念を社会的文化的構造の特質を指すものの換言すれば心理的なアノミー概念ではない点を高く評価し⁽⁴⁰⁾、その継承発展に努める——このような点を考える時、「マートンはデュルケムが終わったところから出発することが出来た」⁽⁴¹⁾ という評価は的を射ていると考えられる——。

すなわち具体的には、Merton のアノミー論の特色は社会的文化的構造のなかの主要な二要素、つまり文化的に規定された目標や目的（文化的目標）と、その目標を達成するための一般に承認された仕方、手続きの規範（制度的手段）の強調の齟齬から結果する行動反応の相違に視点を据えた点に存する。否もっと厳密に言えば、彼の場合第一段階として、第一に文化的目標の強調度が制度的手段のそれに優越する社会類型と、第二に制度的手段の強調度が文化的目標のそれに優越する社会類型とが分類され、どちらの類型も文化的に不統合であり、特に前者の場合の不統合状態がアノミーと規定されるのである。そして、二つの類型の中間に二要素の強調度が均衡する安定した社会類型が理念的に存在することになる（表1を参照されたい）。この点で Merton のアノミー論は社会学的と規定しうる⁽⁴²⁾。

表1 社会類型の三種類

類 型	文 化 的 目 標	制 度 的 手 段	評 価
I	>	<	不 統 合 社 会
II	<	>	不 統 合 社 会
III	=	=	理 想 的 社 会

（注）>は「強調される」、<は「強調されない」、=は「強調度が均衡している」を意味する。

そこで、Merton は「文化的目標と制度的手段とが独立に変異するために種々の類型の社会が生ずる。そのなかで第一義的な関心の的となっているのは第一の類型、すなわち特殊な目標が異常に強調され、その割には制度的手段が強調されないような社会である」⁽⁴³⁾ と考え、「現代のアメリカ文化は一定の成功目標が非常に強調される反面、これと同等に制度的手段が強調されない極端な類型に近い」⁽⁴⁴⁾ とみなす。彼によると勿論現代アメリカ社会で蓄財のみが成功のシンボルであると主張するのはいわれのないことであるが、同時にアメリカ人がその価値尺度において蓄財を高い位置においていないということもいわれのないこととされる。つまり、かなりの程度まで金銭は消費財のために使ったり、権力拡大のための用途にあてたりする以上に、それ自身の

有する価値として神聖視される。貨幣は威信の象徴となるには恰好のものである。Georg Simmel が強調したように貨幣は抽象的でありインパーソナルである。不正な手段であれ正当な手段であれ、とにかく獲得された金銭は同一の財やサービスを購入するために用いることが出来る。都市社会の匿名性がこうした金銭の特性と結び付くが故に、富が高い地位のシンボルとして役立つことが出来る。この富の出所は富豪の住む都市社会では不明であり、たとえ分かったとしてもやがて浄化されてしまうからである。

このように、現代のアメリカ文化は一方では成功の基本的象徴として富を大いに強調しつつ、他方この目標を達成すべく正当な手段となるべき通路をそれほど強調していないという特質を持ち続ける。恰もそれは目標を強調する結果、ただ競技に参加することだけから生ずる満足が減じて優勝の成果だけが満足を与える。そのため競技の場合勝利のために必要な制度的付帯条件がなくなって、「ゲームの規則に従って勝つ」よりもむしろ「ゲームに勝つ」方が成功であると解されるようになると、不正だが技術的に効果のある手段をこっそりと用いたくなる。

では、一方で成功のシンボルとしての富を大いに強調しつつ、他方でこの目標を達成すべき正当な手段をそれほど強調しない現代アメリカの文化的脈絡のなかで生活する人びとは、どのような反応を示すであろうか。また、文化的目標と制度的手段とがますます乖離するようになった文化が、社会構造のなかでさまざまな地位を占める人びとの行動にどのような影響を与えるであろうか。要するに、逸脱行動は通常生物学的衝動から発して、文化の加える抑圧を打破するものであるという学説——例えば、オーストリアの精神病学者 Sigmund Freud (1856—1939) の逸脱原因論に関する「原罪」説のように——に対して、Merton は「どうしてある種の社会構造がその社会の一部の人びとに特定の圧力を加えて、同調的行為よりもむしろ非同調的行為をとらせるか」⁽⁴⁹⁾ という見解、つまり彼自身命名する逸脱原因論に関する「社会環境」説を展開しようと企図する。

そこで、Merton は文化を担う社会のなかの諸個人の適応類型を検討し、文化的価値に対する個人的適応様式の諸類型を表2のように示している⁽⁴⁹⁾。

表2 個人的適応様式の諸類型

類 型	文 化 的 目 標	制 度 的 手 段	適 応 様 式
I	+	+	同 調
II	+	—	偏 行
III	—	+	儀 礼 主 義
IV	—	—	逃 避 主 義
V	±	±	反 抗

(注) +は「承認」、—は「拒否」、±は「一般に行なわれている価値の拒否と新しい価値の代替」を意味する。

I 同調 (conformity) ——社会が安定しているほど、文化的目標と制度的手段の双方への同調が最も一般的で広く普及する。そうでなければ社会の安定と持続は保てないであろう⁽⁴⁹⁾。

II 偏行 (innovation) ——この適応様式は、成功目標が文化的に極めて強調されて、少なくとも成功と覚しきもの(富と権力)を得るために、効果が多いが制度的には禁止されている手段を用いるところに現われる。この反応が生ずるのは、目標への文化的強調に同化しながら、他方

これに相応しい目標達成の仕方や手段を律する制度的規範を内面化していない時である。心理学の見地からみれば、ある目標に非常な情緒を打ち込むと容易に危険を冒しがちであって、こうした態度はどの社会階級の人びとともとるであろう。だが、社会学の見地からみれば次のような問題が生ずる。すなわち、今日の社会構造のどの点がこうした適応類型の誘因となって、これがために特定の社会階層では逸脱行動が比較的多く生ずるのだろうか。いうまでもなく Merton が最も力を込めて説いているのがこの類型であるので、私もこの適応様式について詳述してみよう。

まず、経済の最上層について、道義に即した経営と道義を超えた抜け目のない実行とはしばしば区別がつかず、目標が神聖ならあらゆる手段が正当化されるという「偏行」がみられる。また、ホワイト・カラー層においても犯罪相当行為はごく日常的で異常でも珍しくもないのである。だが、Merton が強調するのは、これら上層のいわば組織犯罪の日常性よりも、逸脱への最大の圧力が下層に対して加えられること、すなわち「金銭的成功の文化的強調が全面的に行なわれているのに、慣例的合法的な成功の手段を得る機会が殆どない状況では、特殊な領域にみられる非行や犯罪はこの状況への『正常な』反応である」⁽⁶⁾ ことである。

今その点を Merton の所論より幾分伺ってみると、アメリカ文化の社会構造の下層を占める人びとに相矛盾する要求をする。一方では彼らは巨万の富をめざして行為するよう要求され、他方制度上では富を獲得する有効な機会が殆ど否定されている。こうした構造上の矛盾の結果は高い比率の逸脱行動である。文化的に規定された目的と手段との均衡は、どんな手段であれ、高い社会的威信を帯びた目的の達成に強調が次第に置かれるにつれて、極めて不安定になる。こうした脈絡においては、あらゆる社会成員に対して経済的富裕や社会的出世を大いに誘発する社会において、垂直的移動の通路が閉されたり狭められている場合には、道徳的に遵奉した「失敗」よりも、非道徳的奸智の方が勝利を占める。

ところで、上述の箇所が意味するところは、逸脱行動の社会的諸原因を理解しようとするれば、金銭的成功の極端な強調のほかに、社会構造の側面を考察しなければならないということである。極めて頻発する逸脱行動は機会がないためとか、あるいはこうした過度の金銭的成功の強調だけから生ずるものではない。比較的厳格な階級構造つまりカスト的秩序では、今日のアメリカ社会にみられる程度よりも遥かに機会が制限されている。逸脱行動が大規模に生ずるのは次のような場合にほかならない。すなわち、一方では文化的価値体系が一般の人びとに対して一定の共通な成功目標を實際何にもまして賞揚しながら、他方社会構造上では大部分の人びとに対して、かかる目標達成のための是認された道が厳しく制限されたりまったく閉されている場合である。換言すれば、アメリカの平等主義イデオロギーは金銭的成功を追求するにあたって、競争相手のない他人や集団の存在を暗黙に否定している。その代りに、同じ成功のシンボルが万人に通用するものと考えられている。目標は階級別に制限されているのではなく、これを超えたものと考えられている。だがしかし、現実の社会組織では目標達成の機会に階級的差別が存している。こうした背景において、「大望」というアメリカの基本的な美德が「逸脱行動」というアメリカの基本的な悪徳を促している。

さて、以上の理論分析は犯罪と貧困との種々の相関関係を説明する一助となろう。貧困はどこでもまったく同一の仕方で作作用する独立変数ではなく、明らかに社会的文化的な従属変数群の一つに過ぎない。貧困それ自体とこれに伴う機会の制限だけでは、著しく高い比率の犯罪的行動を引き起こすものではない。だが、貧困とこれに伴う不利な条件——あらゆる社会成員の認める文化的価値のための競争場裡での——が、支配的目標としての金銭的成功の文化的強調と結び付く

時、高い比率の犯罪的行動を正常な結果とするのである。貧困と犯罪との相関率はアメリカ合衆国よりも東南ヨーロッパの方が低い。これらのヨーロッパ地域における貧民の経済的機会がアメリカよりずっと少ないだけに、貧困とかこれに伴う機会の制限のみでは種々の相関関係を説明しえない。しかし、貧困と機会の制限と文化目標の割り当ての三者を統合して考察すると、厳格な階級構造と各階級別の成功のシンボルとが結び付いている社会よりも、アメリカ社会では貧困と犯罪との相関率が高い理由を説明する根拠がそこに見られる⁽⁴⁹⁾。

Ⅲ 儀礼主義 (ritualism) —— この適応型は容易にこれを確認することが出来る。その意味するところは、金銭的な大成功やとんとん拍手の立身出世をめざす高遠な文化目標を放棄するかまたは切り下げて、その限りで自己の志望を果たすことである。だが、出世をめざす文化的義務を放棄し、自己の要求水準を引込めるとしても、制度的規範はなお依然としていやおうなしに固守されている。これが真に逸脱行動をなしているかどうかはどのようにでもいえる性質のものである。この適応は内的決定の問題であって、外的行動は文化的には望ましい行動ではなくとも、制度上では黙認されているのであるから、それは社会問題であるとは一般に考えられない。

ところで、こうした適応型は社会的地位が当人の業績によって大いに左右されるような社会ではかなり多く見受けられる。それはまた産業組織において生産高を用心深く一定量に止めておく労働者のなかに暗黙にみられる態度でもある。さて、下層階級のアメリカ人が主要な文化的目標の一般的強調と社会的機会の少ない実情のために、必然的に生ずる欲求不満に対して既述の如きⅡの「偏行」という適応型を示すのに比して、中流下層階級のアメリカ人は主としてこのⅢの適応型を示す主な代表者とみられよう。というのは、両親たちが通常たえず圧力を加えて子弟に社会の道徳的命令を遵守させるのは中流下層階級であり、そこでは社会的出世の道に成功する可能性が中流上層階級よりも少ないからである⁽⁵⁰⁾。

Ⅳ 逃避主義 (retreatism) —— Ⅰの適応型つまり「同調」がもっとも多いのに反して、このⅣの適応型すなわち諸個人が文化的目標と制度的手段の双方を同時に放棄する「逃避主義」は恐らくもっとも稀であろう。こうした仕方では適応（または不適応）する人びとは厳密に言えば社会を離れているのではなく社会のなかに存在する。社会学的にみればこれらの人びとは真の「異邦人」をなしている。彼らは共通な価値の枠組を持ち合わせていないので、彼らを社会の成員とみなしうるのははなはだフィクショナルな意味においてに過ぎない。内閉症患者、最下層民、放浪者、無頼漢、浮浪者、慢性のアルコール中毒者、麻薬常習者の適応的活動にはこの種に属するものがある。彼らは文化的に規定された目標を放棄しており、彼らの行動は制度的規範と一致しない。

さて、社会構造に原因を求める見地からいえば、こうした適応様式が極めて生じ易いのは、文化的目標と共に制度的手続きを個人が完全に体得してこれに愛着と高い価値を与えながら、これを達成するための制度的手段をもってしては成功出来ない場合である。その結果二重の葛藤が生ずる。すなわち、制度的手段をとらねばならない内面の道徳的義務と不法な手段に出ざるを得ない圧力とが衝突して、個人は正当かつ効果的な手段から締め出される。競争的秩序は維持されるが、こうした秩序に対処し得ない欲求不満をもった不利な地位を占める個人は脱落する敗北主義や寂靜主義や諦めなどが逃避のメカニズムに現われて、この結果ついに社会の要求から逃避せざるをえないようになる。だから、それは正当な手段では常に目標に近づき得ず、また内心の禁止によって不当な手段を用いえないために生ずる方便であって、こうした過程は成功目標の至上価値がまだ放棄されていない場合に生ずる。このような葛藤の解決のためにはぎりぎりに切羽詰

まった二つの要素つまり目標と手段とを放棄しなければならない。ここに逃避は完全となり葛藤は取り除けられ、個人は世間から逃れる⁵¹⁾。

V 反抗 (rebellion) ——この適応の結果として人びとはその環境をなす社会構造から逸脱して、新しいまったく一変した社会構造を実現しようとする。それは支配的な目標や標準からの疎外を前提とする。これらの目標や標準はまったく恣意的なものともみなされるようになる。そして、恣意的なものは厳しく人に忠誠を強制することも正当性を主張することも出来ないものである。というのは、そうでなくてもよいからである。アメリカ社会では組織的な反抗運動の明らかにめざすところは、成功の文化的標準をまったく一変して、真価と努力と報酬とのより緊密な対応関係を用意する社会構造をもたらすことである。

だが、この「反抗」の適応様式を検討する際一見類似的だが本質的に異なる適応型つまり「怨恨」(ressentiment) と区別しなければならない。換言すれば、「怨恨」と「反抗」とを区別する重要な点は前者には真の価値変革を伴わないことである。「怨恨」とは内心は望ましいのだが手に届かない目標が実際には尊ぶべき価値をもつものではないという、いわゆる負け惜しみの型式を意味する。他方、「反抗」は真の価値転換を示すものであって、欲求不満の直接経験ないしその身代りとなる経験の結果、これまで賞賛されていた価値をまったく叩きつけてしまう。だが、こうした両者を区別することもさることながら次の点に注目してみたい。すなわち、「怨恨」や「反抗」を抱く人びとを組織して革命的集団をつくるのは、最下層民ではなくむしろ新興階級の人びとであるのが通例であることである⁵²⁾。

以上詳細に考察してきた Merton の見解において、理論構成の第一段階で、社会的文化的構造の二要素間の不均衡状態わけでも文化的目標の強調と制度的手段の軽視による不統合状態と定義されたアノミーは、社会内の諸個人の適応様式の類型論を展開する第二段階では、社会構成の側面すなわち階層化された機会との関連において、逸脱行動への圧力を生み出す社会的状況として新たに再定義されている、と解することが出来よう⁵³⁾。

VI お わ り に

私は第 I 節課題の設定に始まって、第 II 節 Merton の生涯と業績、第 III 節 Merton の社会学理論、第 IV 節 Merton の社会学方法論、第 V 節 Merton の「社会構造とアノミー」論に至るまで、彼の所論に比較的忠実に耳を傾けてきた。そこで最後に、Merton のシンボル・マークともいえる「中範囲の理論」をはじめ、「社会学における機能分析の範例」、そして「社会構造とアノミー」論に示された内外の学者の賛否両論のなかから、二、三問題点・疑問点を指摘して結びに代えたい。

第一点として、Merton が理論と経験的調査との統合をはかるべく繰り返し強調してきた、「中範囲の理論」についての賛否両論の飛び交うなかから一、二重要な論点をみてみよう。

まず、彼の「中範囲の理論」を適用し、優れた研究業績をあげたものに、アメリカの社会学者 George C. Homans (1910 —) の『人間集団』(*The Human Group*, 1950) がある。次いで、Homans もまたこの著において、一方で「初代の社会学者である Comte, Spencer の世代、そして第二世代の Pareto, Durkheim, Max Weber の世代は、不十分ながらも偉大な総合をつくりあげた。第一次世界大戦と第二次世界大戦との間に活躍した第三世代はその先輩の例を避けた。しかし彼らは多くの示唆に従って特殊社会集団の多くの優れた詳細な研究を行なった。……第四

世代目である現代の社会学者は特殊研究が引き出した観念を組み立て、明白にまた一般的に構成するためにもう一度総合の必要を感じている。社会学は事実を貪るように食った。それらを消化することが必要である」⁵⁴⁾と述べると共に、他方で「多分われわれは全体の社会と国家に適用しようとする社会学的総合を扱うことは出来ないであろうが、小集団に適用しようとする社会学的総合を扱うことはまさに可能である」⁵⁵⁾と主張し、「中範囲の理論」の必要性を説いている。

だが、このように賛成の意を示す人びとが多いなかであって、既に第Ⅲ節でも指摘したように、理論家の一人として暗に批判された Talcott Parsons も、その著『社会学理論論集』(*Essays in Sociological Theory*, 1954) のなかで、中範囲の理論のような「より特殊な、またある意味ではより控え目なタイプの理論の仕事がもつ重要性を非難しようとする気持は毛頭ない。むしろまったく正反対である」⁵⁶⁾と主張してはいる。けれどもその同じ彼が、このように中範囲の理論を認めた上でなおかつ一般理論の必要性を熱っぽく説く。それというのも、特殊理論の追究する問題を輪郭付け、その一般的意義を確定し、また特定問題の解決が他の問題領域に対してもつ含意を明らかにするには、どうしても広い枠組としての概念図式を欠くことが出来ないからである。それ故、一般理論のために中範囲の理論を捨てよというのではない。両者は一般化のレベルに差があるに過ぎず、実質的には相互補完的である⁵⁷⁾。

そこで、Merton もその後に行った論文「役割セット——社会学理論の諸問題——」では、中範囲の理論の時間的優先というさきの主張のトーンを落とし、いかなる研究に傾くかは研究者の好みとか気質上の偏りにも関係があると主張している⁵⁸⁾。だが、今日の社会学に対して中範囲の理論がもつ戦略的意義を個人の嗜好の問題に委ねるこの奇妙な発言を、Merton の主著『社会学理論と社会構造』の訳者の一人森好夫(1914—)は「元も子もなくなる」と批判している⁵⁹⁾。

第二点として私は以下のことを指摘しておきたい。すなわち、Merton は機能分析の範例の第三の目的として、「範例は各種の機能分析のもつ純粋に科学的な含蓄だけではなく、その政治的、時にはイデオロギイ的係わり合いを社会学者が敏感に捉えることをめざしている。機能分析が暗黙の政治的見地を前提とする点と『社会工学』(social engineering) と関係をもつ点は、この範例のなかで不可欠の位置を占める問題である」⁶⁰⁾と述べている。また、彼は顕在的機能と潜在的機能の両概念を区別する素出的目的を記述するなかで、「顕在的機能と潜在的機能の両概念は、社会工学の専門家の理論内容における不可欠な諸要素である。こうした決定的な意味において、両概念は単に理論的なだけではなく、すぐれて実践的でもある」⁶¹⁾とも主張している。このように、Merton の所論には機能分析の実践的姿勢が社会工学として明確に提示されている。だが、道徳的非難に代る社会工学は事象の顕在的機能と潜在的機能の区分を出発点にしているが、この区分は Merton が考えるほど容易ではない、といった疑問を提示する人びとも多い⁶²⁾。

また、Merton の掲げた「社会学における機能分析の範例」の 11 項目についても、彼の意図があくまでも機能分析の整理を第一義としているところから、多くは問題の所在を提起したにとどまり、概念設定もまた具体的展開と一義的決定性を欠く場合が少なくないし、その説明も精粗区々であって子細に検討すべき多くの余地を残している⁶³⁾。わけても、彼が第五の事項として取り上げている「機能的要件」は、範例を構成する諸事項のうち論理的アルファたる地位を占めているにも拘らず、Merton 自身「これは機能理論において最も曖昧で経験的にもっとも論議の多い概念の一つである」⁶⁴⁾とは主張しているものの、アメリカの社会学者 Marion J. Levy (1918—) が『社会構造論』(*Structure of Society*, 1952) ——全体を貫く特色は著者自身いうように「構造＝機能的要件分析」である——で示しているほどに充分なものでもない⁶⁵⁾。

第三点として、Merton の「社会構造とアノミー」論についても、多くの称賛の声と共に非難の声もまた多く聞かれる。

そのなかから非難の声を一、二聞いてみよう。まず、わが国の社会学者宮島喬（1940— ）は、文化的目標の強調度が制度的手段のそれに優越する社会類型のもたらす文化的な不統合の状態をアノミーと規定した Merton の所論について、次のような批判を加える。すなわち、「マートン理論の基礎視角そのものについていうならば、社会学理論の性格上ほぼ機能主義の立場に位置するかれは、『文化的目標』と『制度的手段』という二つのキー・カテゴリーを、両者の統合・整理状態のありうることを想定しつつ設定しているようにみられるし、さらにその両カテゴリーじたいが、歴史的文脈から切り離されてたんに道具的に使用されるという危険性をもっており、多くの面で不徹底さはまぬがれない」⁽⁶⁶⁾ と。そして、彼は Merton のアノミー論を押し進めるためには、以下の四点の認識が必要であると考えている。その四点とは、第一に文化的目標というカテゴリーによって示されているその社会の支配的な目標価値が多かれ少なかれ支配階級＝体制の観念を内在させているということ、第二に階級を超えた普遍的な欲望シンボルは高度に発達した資本主義社会に多少とも通有の現象であるということ、第三に金銭的成功への欲求のみならず、あらゆる欲求の領域において多かれ少なかれ他律的な決定の機構が働いているということ、第四に客観的な物質的諸条件や機会享受の諸条件をめぐって階級的の不平等が貫徹されているが、このような階級矛盾は資本主義的生産関係にとって不断に維持・再生産されていくものであるということである⁽⁶⁷⁾。

次いで、Merton はアノミー概念を社会学的概念であるとししばしば強調しながら、アノミーの具体的処理においては反応類型分類が中心課題となり、社会心理学的次元にとどまっている。また、Merton の社会学に限らずアメリカ社会学の大部分における中立主義、客観主義はアメリカ社会の抱えるシリアスな諸問題について何ら処方箋を書くものでもない。別言すれば、Merton のアノミー論とりわけ著名な個人的適応様式の五類型の現実的有効性あるいはリアリティは、精神病・ノイローゼ・麻薬常習・非行・犯罪等々の社会問題に対して個別具体的に実践活動を行なう人びと、つまり精神科医、ソーシャル・ワーカー、カウンセラー等にとって何の意味も持たない⁽⁶⁸⁾。

注

- (1) Merton の生涯と業績を書くにあたっては、Robert K. Merton の *Social Theory and Social Structure*, The Free Press, 1949, Rev. ed., 1957 の Acknowledgments (pp. ix—x) をはじめとして、鈴木広「マートンの方法」『現代社会学群像』（徳永恂・鈴木広編、恒星社厚生閣、1990 年）111—113 頁、佐藤智雄「マートン」『現代アメリカ社会学』（早瀬利雄・馬場明男共編、培風館、1954 年）267—273 頁、そして阿閉吉男「マートン」『理想』第 253 号（理想社、1954 年）95—97 頁等を参照した。
- (2) Robert K. Merton, *Social Theory and Social Structure*, The Free Press, 1949, Rev. ed., 1957, p. 3. （森東吾ほか訳『社会理論と社会構造』みすず書房、1961 年、1 頁。）
- (3) *Ibid.*, p. 85. （同、78 頁。）
- (4) *Loc. cit.* （同上。）
- (5) *Ibid.*, p. 102. （同、94 頁。）
- (6) 小笠原真「C. Wright Mills 研究——アメリカ社会学史の一節——」『奈良教育大学紀要』第 40 巻第 1 号、奈良教育大学、1991 年、51—73 頁。

- (7) Robert K. Merton, "The Role-Set: Problems in Sociological Theory", *The British Journal of Sociology*, June, 1957, Vol. III, No. 2, p. 108.
- (8) Merton, *Social Theory and Social Structure*, p. 5. (森ほか訳、前掲訳書、3頁。)
- (9) *Loc. cit.* (同上。)
- (10) *Ibid.*, p. 86. (同、79頁。)
- (11) *Ibid.*, pp. 93-95. (同、86-87頁。)
- (12) *Ibid.*, pp. 95-96. (同、87-88頁。)
- (13) *Ibid.*, p. 96. (同、89頁。)
- (14) *Ibid.*, p. 97. (同、89頁。)
- (15) *Ibid.*, pp. 97-98. (同、89-90頁。)
- (16) *Ibid.*, pp. 99-101. (同、92-93頁。)
- (17) *Ibid.*, pp. 5-6. (同、3頁。)
- (18) *Ibid.*, p. 10. (同、8頁。)
- (19) *Ibid.*, p. 9. (同、6-7頁。)
- (20) Merton, "The Role-Set: Problems in Sociological Theory", p. 108.
- (21) Merton, *Social Theory and Social Structure*, p. 19. (森ほか訳、前掲訳書、16頁。)
- (22) *Ibid.*, pp. 50-54. (同、45-49頁。)
- (23) *Ibid.*, p. 48. (同、43頁。)
- (24) *Ibid.*, p. 16. (同、13-14頁。)
- (25) *Ibid.*, p. 51. (同、46頁。)
- (26) *Ibid.*, p. 53. (同、48頁。)
- (27) *Ibid.*, p. 24. (同、20頁。)
- (28) *Ibid.*, p. 51. (同、46頁。)
- (29) *Ibid.*, p. 60. (同、55頁。)
- (30) *Ibid.*, pp. 64-65. (同、58-59頁。)
- (31) *Ibid.*, pp. 65-68. (同、59-62頁。)
- (32) *Ibid.*, pp. 68-70. (同、62-64頁。)
- (33) *Ibid.*, pp. 70-72. (同、64-66頁。)
- (34) *Ibid.*, pp. 72-73. (同、66-67頁。)
- (35) *Ibid.*, pp. 73-75. (同、67-68頁。)
- (36) *Ibid.*, pp. 75-76. (同、68-70頁。)
- (37) *Ibid.*, pp. 76-79. (同、70-72頁。)
- (38) *Ibid.*, pp. 79-80. (同、72-73頁。)
- (39) 小笠原真『二十世紀の宗教社会学』世界思想社、1986年、23-27頁参照。
- (40) Merton, *Social Theory and Social Structure*, pp. 161-162. (森ほか訳、前掲訳書、149-150頁。)
- (41) 矢沢修次郎『現代アメリカ社会学史研究』東京大学出版会、1984年、294頁。
- (42) 村上直之「マートン『社会構造とアノミー』論の再考察」『京都大学教育学部紀要』XXIV, 京都大学教育学部、1983年、75頁参照。
- (43) Merton, *Social Theory and Social Structure*, p. 134. (森ほか訳、前掲訳書、124頁。)
- (44) *Loc. cit.* (同上。)
- (45) *Ibid.*, p. 132. (同、121頁。)
- (46) *Ibid.*, p. 140. (同、129頁。)
- (47) *Ibid.*, p. 141. (同、130頁。)
- (48) *Ibid.*, p. 145. (同、134頁。)
- (49) *Ibid.*, pp. 141-149. (同、131-138頁。)
- (50) *Ibid.*, pp. 149-153. (同、138-141頁。)

- (51) *Ibid.*, pp. 153 – 155. (同、141 – 144 頁。)
- (52) *Ibid.*, pp. 155 – 157. (同、144 – 145 頁。)
- (53) 村上、前掲論文、76 頁参照。
- (54) George C. Homans, *The Human Group*, Routledge & Regan Paul Ltd., 1951, p. 3.
- (55) *Loc. cit.*
- (56) Talcott Parsons, *Essays in Sociological Theory*, The Free Press, 1954, p. 365.
- (57) *Loc. cit.* なお、井上博二「R. K. マートンの理論についての一考察」『社会学評論』第 5 巻第 2 号、日本社会学会、1955 年、119 – 126 頁にもまったく同様な指摘がある。
- (58) Merton, “The Role-Set : Problems in Sociological Theory”, p. 109.
- (59) 森好夫「マートンとミルズ——社会学の反省——」『人文研究』第 11 巻第 11 号、大阪市立大学文学会、1960 年、4 – 9 頁。
- (60) Merton, *Social Theory and Social Structure*, p. 55. (森ほか訳、前掲訳書、50 頁。)
- (61) *Ibid.*, p. 81. (同、74 頁。)
- (62) Marion J. Levy, *Structure of Society*, Princeton University Press, 1952, pp. 56 – 88. 中島龍太郎「マートンの潜在的機能(上)(下)」『ソシオロジ』第 4 巻第 1 号、第 4 巻第 3 号、社会学研究会、1955 年、56 年、19 – 34 頁、1 – 18 頁。仲村祥一「中範囲の実践について——マートン批判を手がかりに——」『ソシオロジ』第 9 巻第 1 号、社会学研究会、1962 年、25 – 49 頁など。
- (63) 金沢実「社会学における機能的分析の再吟味——マートンの所説を中心として——」『社会学研究』第 9 号、東北社会学研究会、1955 年、19 頁参照。
- (64) Merton, *Social Theory and Social Structure*, p. 52. (森ほか訳、前掲訳書、46 – 47 頁。)
- (65) 森好夫「機能的要件の概念について」『人文研究』第 5 巻第 8 号、大阪市立大学文学会、1954 年、1 – 18 頁参照。
- (66) 宮島喬「アノミー論への現代的視角——デュルケム理論と現代——」『思想』第 547 号、岩波書店、1970 年、31 頁。
- (67) 同、31 – 33 頁。もっとも宮島のこのような主張に対しても、佐々木交賢の反論もある。詳しくは、佐々木交賢「文化的目標と制度的手段との分離 (3)」『ソシオロジカ』第 6 巻第 1 号、創価大学社会学会、1982 年、95 – 97 頁を参照されたい。
- (68) 佐々木、前掲論文、106 頁、村上、前掲論文、81 – 82 頁参照。

A Study on Robert K. Merton

— A Chapter to the History of American Sociology —

Shin OGASAWARA

(Department of Sociology, Nara University of Education, Nara 630, Japan)

(Received April 20, 1992)

In this paper I examine some major works of Robert K. Merton (1910—), who is not only America's but also world's leading theorist of sociology. After a brief overview of Merton's life and achievements, I take up his concept of the "theories of the middle range", a concept which he advocated as a product of his critical reconsideration of the main achievements in sociology. I also consider Merton's methodology, particularly his "functional analysis", and his "Social Structure and Anomie" on which he concentrated with all of his youthful enthusiasm. Finally, I make a few critical remarks on Merton's theory.